碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

2年1月号（210号）

発行者　根岸岳萃

編集者　中村愛岳

2年1月現在会員数	
逗子地区	162名
葉山地区	262名
大船地区	45名
（合計）	（469名）

新年のごあいさつ

会長　根岸　岳萃

明けましてお目出度うございます。皆さんが御家族共々、平成二年の新春を迎えられましたことお慶び申し上げます。

昨年は、成功裡に終了致しました県本部三十五周年記念吟道大会に対する、当会の活躍はすばらしいものでした。県本部の中枢としてのご活躍、会長として感謝に堪えません。

本年は十年後に迫った21世紀に向って躍進する第一歩の年としたいと思っております。そのためにも、後継者の育成は重要な課題であり、会員の倍増を目標として、吟道普及賞を設置、昨年の功労者に感謝の意を彰することにいたしました。

次代を担っていただく若い指導者も、又必要不可欠です。準師範は、六段以上の方で、指導するやる気と、能力があれば、誰でも有資格者です。そのような方の出現を期待しています。

最後に今年も楽しく、活気ある碩心会になるよう、益々吟道に精進されますことを御健康と併せ祈念致しまして、新年のごあいさつと致します。

栄誉に感謝し吟道に貢献を

副会長　加藤　岳相

明けましてお目出度うございます。人生の大半を、激動の昭和と共に生き抜いた私達は、幸福に満ち溢れた平成の時代へと変遷されました。

然し、この幸福な世にも、昭和の戦前戦後の教育方法の違いか、道徳の面に於ても、我々戦前派には割切れぬことが多々ある世相です。口に出すと、そのような考え方は古いとよく言われますが、教育の基本精神は今も昔も変らないのではないかと思います。この世相を正すのは、我々吟界の任務ではないでしょうか。

私は昨年、思いもかけぬ宗佑の贈位、そして審査代行者、県本部総務理事の委嘱と、幸福に満ちた年でした。これも偏に先輩諸先生のご尽力と、碩心会々員の皆様の、応援の賜と、深く感謝しておりますと共に、責任の重大さを痛感している昨今です。

吟は礼に始まり礼に終ると言われています。今年はこれらの栄誉の任務にそえるよう、今迄以上に吟道を研鑽し、吟技と吟道精神の高揚を、後輩に指導すると共に、地域社会の一員としても、吟道精神をふまえて、世相の浄化に微力ながら貢献し、皆さ

んに愛され、信頼される人になりたいと思っております。

今年も和合して楽しく

副会長　小峰　桜岳

皆様、明るい平和なお正月を迎えられました事とお慶び申し上げます。

数ある年中行事の中でも、お正月は昔から、誰にとっても親しみ深いものです。年の始めとして、普段とは違った新鮮な気持で、物事を考えられるチャンスです。

碩心会も組織を和合して活躍しております。自分の行動が、常に皆さんへの思いやりを忘れないようにしたら、お互いがどんなにか楽しい毎日を過せるのではないのかと思います。

昨年の諸行事も、成功裡にすみ、皆様の御協力に感謝致しております。今年も又多くの行事が予定されておりますが、よろしく御協力の程お願い致します。皆様の御健康を祈念して御挨拶と致します。

更に吟道への精進を誓う

相談役　三井　岳瓏

明けましてお目出度うございます。昨年は国内的にも国際的にも、多事多難な一年でありました。然し、平和への曙光が少しは見えはじめつつある今年であります。

私自身にとりましても、吟に明け、吟に暮れた恵まれた一年でありました。この二月で満八十三歳となりますが、大先輩の松井先生が東奔西走、あのお元気な、吟道へのご精進を思えば、更に更に頑張らなくてはと、心に鞭打つ思いに駆られます。高梨さん、武井さんの八十九歳で尚且つお元気な御精進にも励まされること一入であります。死ぬまで声の出る間は、皆様共々、吟の道に心を致すべく、堅く心に誓うこの年であります。

よいお弟子さんに恵まれ、励まされる、和やかな教場は、私の安住の地であり、心に倖せを感ずる楽天地なる哉の感も、又しみじみと感ぜられます。今年も又ご一緒に頑張りましょう。

賀正・今年もよろしく

（指導者一同）

松井岳洋　根岸岳萃　加藤岳相
小峰桜岳　三井岳瓏　沼田岳雷
井沢潮岳　加藤圭岳　中村幸岳
竹石憲岳　千葉劒岳　千葉香岳
中村愛岳　森田暁岳　岩崎恵岳
鈴木孝岳　守谷崇岳　松野宝岳
杉山雪岳　秋元梁岳　鈴木萃岳
佐藤湧岳　矢嶋悦岳　黒崎李岳
広瀬翔岳　村田瀞岳　石渡桂岳
沼田義岳　清水耀岳　伊藤峯岳
白井寿岳　白井麗岳　上村象岳
渡辺誠岳　一柳道岳　佐久間爽岳
木村松岳　寺脇歌風　立沢御風
小形雄風　宇都宮徳風　千葉美風
松井正風

（名簿順）

平成二年度・行事予定

（総本部関係）

3・18(日)第97回全国大会…明治神宮会館
7・15(日)第16回選抜大会…九段会館ホール
7・28(土)〜7・29(日)夏期吟道講座…九段会館ホール
10・7(日)第98回全国大会…山梨・富士市

（神奈川県本部関係）

1・28(日)初吟・初理事会…大和・北京飯店
2・18(日)八段審査会
2・25(日)皆伝以上審査会…平塚農業会館
3・18(日)全国大会参加……明治神宮会館
4・15(日)全国選抜予選会…静岡大仁町民会館

（神・静地区）

5・13(日)第一地区大会……
6・3(日)青少年大会……防衛大学校
6・24(日)定期総会（改選）…湘南地区
7・8(日)第二地区大会……

8・5(日)指導者吟法講座…
9・2(日)京浜地区大会……
9・23(日)湘南地区大会……
10・7(日)～10・9(火)全国大会参加吟行会（富士急ハイランド・富士五湖・黒部渓谷・他）
10・21(日)県本部大会……
11・24(土)納吟・理事会……

碩心会春期審査会

とき・平成二年三月十一日(日)
ところ・逗子市図書館ホール

西郷隆盛と大久保利通

今年のNHKの大河ドラマは〝翔ぶが如く〟で、西郷隆盛と大久保利通をとりあげるという。二人とも我々に馴染深い人物であるが、特に西郷は、詩吟を学ぶ我々には、詩を通しても関心ある人物である。二人の人物像を頭に入れて、テレビをみたら、又一段と興味深く楽しんでみられるかも…。

西郷は文政十年（一八二七）十二月七日、鹿児島城下加治屋町の、薩摩藩士西郷吉兵衛の長男に生まれ、幼名を小吉、次いで吉之助と称した。それより二年八ヵ月後の天保元年（一八三〇）八月十日大久保次右衛門の長男利通も同町内で産声をあげた。幼名を正助、次いで一蔵と称して、後に甲東と号した。因に生地が甲突川東岸にあったのでこれを号したという。両家の家格は、士族全体から見て中級武士階級で、二人とも七、八歳頃より藩校に通学したが、機略勇断などの智的分野では、正助が断然他を圧倒していた。性格も才能も正反対の吉之助と正助は、長短相補うのでうまが合うのか、実に仲がよかった。

安政五年（一八五八）七月藩主島津斉彬が死去し、十月に安政の大獄が始まると、薩摩藩も日本国内も、政情がからりと一変した。西郷、大久保等の勤皇活動もいよいよ曲折をまし、多岐にわたるようになった。

明治六年、西郷陸軍大将、兼参議に就任。同年十月、征韓論争、西郷等下野帰国。同年十一月、大久保、参議、内務卿兼任。西郷が故山に帰着した時に詠んだ詩がある。

我家の松籟塵縁を洗う
満耳の清風身仙ならんと欲す
謬って京華名利の客となり
この声聴ざること已に三年

この三年間政争に明けくれたが、故郷に帰って、我が家の松風の音を聞くと、身も心も洗われて、仙人になったようだと、自分の心境を詠んだものである。

二人が対立し、不仲になった時期は、そして原因は何であったのか。そもそも西郷には己を軍人と規制し、天より与えられた使命は、倒幕戦争で、江戸開城を完了した時に成就した。

一方大久保は、国内事務掛として、維新政府の構築、政令の改廃、施政の整備等に全力を傾注していた。しかし荒療治には西郷の力を必要としたので、首席参議に据え、威圧力で断行していた。そして廃藩置県、徴兵令に反発する士族の不満解決策に、対韓政策を打ち出した。

この問題の紛糾が、両者を決定的なものとした。明治七年二月の、佐賀の乱における大久保の行動は、江藤新平等を極刑に処した。この報道が薩摩士族をして、大久保不信の度を深めていった。しかして、西南戦争として燃えあがっていった。薩摩人としての大久保は、生涯を通じて兄事し、且つ敬愛していた西郷の率いる薩軍を討伐することは、身を切られるよりも辛かったに違いない。

そして、実の兄弟以上に親しい間柄であった二人は、征韓論を境に対立し、互いに生命をかけて相争い、西郷は明治十年九月、城山で、大久保は翌年五月、登庁の途中、刺客六人により暗殺され、共倒れの形で世を去ったのであった。

練吟メモ

漢詩第一号

○日本詩吟学院編の「和漢文化史小年表」によると七五一年に日本で始めての漢詩集「懐風藻」ができた。翌七五二年には東大寺に大仏ができたことが並んで載っているので、年代の大体の想像がつくと思う。因みに李白は七六二年没、杜甫は七七〇年没、万葉集の完成は七八一年などが同じ頁に載っているので、年表を見るのも面白い。

○懐風藻は、近江朝から奈良朝に至るまでの漢詩を集めたもの。天皇はじめ皇族、朝臣、学者や僧等六十四人の詩百二十篇が収められている。その開巻第一に掲げられたのは次の五言詩である。

侍宴　大友皇子

皇明光日月　帝德載天地
三才竝泰昌　萬国表臣義

（訓読）宴に侍す

皇明日月と光き、帝德天地と載す。
三才竝びに泰昌、万国臣義を表す。

（通釈）天智天皇の御明徳は、日月の下土を照覧するが如く、天地の万物を覆載するが如く、天地人の三才（万物）もおのおのその処を得て、ともに安らけく隆昌におもむき、遠く海外万国まで臣順の意をあらわし来たっている。いともかしこき次第である（新釈漢文大系より）

まさに日本の第一号の漢詩である。天智天皇即位礼の後の正月七日、祝宴の際の作とされる。時に皇子御年二十一歳。詩は極めて荘重典雅な絶唱とされている。

○大友皇子は天智天皇の長子、幼にして聡明卓偉、十七歳にして太政大臣となった。天皇は即位されると、大津の地を選定して都城を営まれた。いわゆる淡海大津宮である。しかし、不運にも遷都後四年にして宮城は焼け落ち、間もなく天皇は崩御された。これを機に壬申の乱（天智天皇の御弟と大友の皇子ー即位していたがーとの皇位争い）となったが、近江軍全く振わず、大友天皇は自害された。御在位七ヵ月、御年二十五歳であった。明治三年、弘文天皇とおくり名された。

○本年秋には、今上天皇陛下の即位式が挙行される運びとなっているので、平成二年の新春を寿ぎ、日本漢詩の第一号である大友皇子の五言詩を掲げ、詩歌吟詠のますます盛んならんことを祈念してやまない。

○旧教本(四)でお馴染みの柿本人麿の次の和歌は、大津宮時代の旧都を回顧したもの。

淡海の海　夕浪千鳥　汝が鳴けば
こころもしぬに　古おもほゆ

（入　会）

551 藤原かね　横浜市栄区笠間町五八三
（大船A）（電）〇四五ー八九二ー五二一〇
552 矢島文子　葉山町堀内九〇五
（堀内・F）（電）〇四六八ー七五ー〇四七二
553 矢島百合子　葉山町堀内一二一二
（堀内・F）（電）〇四六八ー七五ー〇五四六
554 滝口良子　横須賀市池上町七ー一〇ー七
（唐木山）（電）〇四六八ー五一ー三五六九
555 鈴木みさ　葉山町堀内三八八
（堀内・E）（電）〇四六八ー七五　店〇五四三　自六八九九

（退　会）

111 高橋朗風（沼　間）
363 大山晃泉（逗子B）
239 角田嘉風（上　原）
535 太田マッ枝（逗子B）

一九九〇年の元旦は、雲一つない素晴らしい天気で幕があきました。相模湾に浮ぶ冠雪の富士を中央に、右に箱根、左に伊豆の連山をみる葉山の海の眺めは絵をみるが如きです。

何となく今年はよいことある如し　元旦の朝晴れて風なし　啄木

一月は「睦月」、知人、親戚達が往来し、親しみ、睦み合うから睦月…とか。碩心会も心新たに、和を以て連携を保ち、会員増加にがんばりましょう。